

## 幸手への思いを写真にこめて

明里は親友のさくらと教室に向かいながら、終わったばかりのひ難訓練について話していた。

「今年のひ難訓練もしっかりできてよかったね。」

「そうだね。でも、最近ひがしにほんだいしんさいは東日本大震災や常総市じょうそうしでおこった水害のような災害が多くて心配だね。」

さくらの話に明里は大きくうなずきながら、校長室の前の「幸手の歴史」と書かれたコーナーに目を止めた。

「ねえ、さくら。この写真も道路が水でいっぱいになっているよ。」

「本当だ。『幸手の歴史』って書かれているけど、いつごろの写真なんだろう。」

そのコーナーには、白黒写真が並ぶ。明里は一枚一枚を見ていく。お祭りを楽しむ人々のカラー写真もある。写真の中には、昔の町の様子うらが映し出されていた。

（私は幸手に生まれ育ってきたのに何も知らなかったな……。）

昔の道路や家並みなみなど、明里は興味深く見入った。ふと、明里はあることに気づいた。

「この写真、みんな『はまたどくいち浜田得一さん』がさつえいしているよ。」

「本当だ。この写真も……。」

先生にたずねると、幸手市の民具資料館にもっとたくさんたくさんの写真



学習した日

月  
日



が飾られていることを教えてくださった。もしかしたら、幸手の昔を知るチャンスかもしれない、と明里は思った。

次の土曜日、明里はさくららをさそって、お母さんと三人で幸手市民具資料館を訪れた。資料館には、浜田さんのさつえいした写真が展示されていた。浜田さんは上高野に生まれ、幸手の人々の暮らしだけでなく、川や橋、道など、大正から昭和にかけて多くの写真を残していることが分かった。明里は「災害の記憶」という写真コーナーで足を止めた。幸手をおそった大正十二年関東大震災、昭和二十二年カスリーン台風による大水害。いずれも九月に起こった災害だ。

「道が川のように水でいっぱいだ……。」

「建物や電信柱もたおれて、みんな大変そう。」

（浜田さんは二つの大災害を体験して、自分も周りの人も大変なのに写真に残して何を伝えたかったのだろう——。）

かざられている写真を見てみると、職員の方がさらに浜田さんのとった写真をまとめたアルバムを見せてくださった。明里はたくさんさんの写真を見つめていると、一枚の写真が目飛び込んできた。

「あっ。学校で見たお祭りの写真だ。大水害から五年後だったなんて。」

「町の人々が力を合わせて、ここまで復興したんだね。」  
大水害のあとは見られず、明里もさくらも自然と笑顔になる。





復興を喜ぶ人々の姿に力強さを感じた。

「浜田さんは幸手の写真をとりに続けることで人々に感謝され  
たんだよ。そのことに喜びを感じていたんだね。」

職員の方の言葉に明里もさくらも大きくうなずいた。

（今の幸手があるのは人々が支え合ってきたからなんだ。そのことを教えてくれた浜田さんの写真をいつまでも大切に  
していかなくては——。）

明里は写真を通して、浜田さんの幸手への思いが心の中で  
生き続けていく気がした。そして、もっともっと幸手のこと  
を調べてみたいと思った。

● あなたが大切にしていきたい幸手のよいところを書いてみま  
しょう。

● 身近なところで地域ちいきの方が協力したり、支え合っているもの  
にはどんなものがありますか。